

”黒い木の間蝶”という名で、雑木林の暗い林床を棲家とし、落葉の上に羽を閉じてとまっているときには、右図に示すように翅裏の模様が落葉と同化してしまっていて、そこにチョウがいるとは容易に確認できない、そんな見事なカムフラージュを得意とするのがクロコノマチョウです。私は高知市で過ごした小学校時代に本種の標本に「コノハチョウ」というラベルをつけて高知市科学展に出品し、後に中学校進学でご指導を仰ぐこととなる審査委員の故岡本盛康先生に、クロコノマチョウの間違いだよとご指摘いただいた思い出深いチョウです。幼虫はススキやジュズダマの葉を食べて育つので、近くでみ



かけても不思議ではないのですが、通常市街地で見かけるチョウではありません。ところが、2009年11月21日、テニスを終えて帰宅した玄関先ポーチ部にまぎれもない本種が羽を閉じた静止状態で出迎えてくれたときは驚きました。もともと南方系のチョウで、近年特に早春、加古川市志方町周辺の雑木林内で越冬個体を見る機会が増えてはいるのですが、雑木林などが全くないこんな住宅地にいったいどういう経緯で現れたのか。本種は雑木林内でも、驚かすとピョンピョンと跳ね飛ばすようなランダム飛翔で数メートルも飛ばすすぐに羽を閉じて、あたりの落葉と同化して姿を見失う、そんな挙動が特徴的で、一気に長距離飛翔をするようなチョウとは思えません。その



のような珍しい飛来記録なのに、玄関を通らねばカメラを持ちだせないわけで、結局じっと静止するチョウに近づいてそっと羽をつまんで捕獲することとなりました。そして吹流しの中に取り込み、底部に落葉をしいて室内で越冬できるかどうか観察を続けたのですが、時々霧吹きで湿気をあたえ、その際には驚いて羽ばたくなど元気を保



っていたのに、室温が4-6℃で野外では零下となる寒波が数日継続した12月21日、吹流しの下部につかまるように静止していたチョウが落葉のあいだに降りてじっとしており、場所を移しただけかと思ってよくみると、残念ながら息絶えていました。仕方なく標本化しましたが、秋型の特徴である前翅のオレンジ紋が右前翅で色薄く、羽化してからかなりあちこちと飛び過ごしてきた個体だと考えられます。6-8月に発生する夏型はこのオレンジ模様がなく一様に黒くてお世辞にもきれいだとはいえません。1960年代、郷里の高知市五台山の山腹：ススキの茂る山道沿いで、食痕のあるススキ株の葉裏周辺をよく調べると、グリーン一色のきれいな蛹をみつけることができましたが、今でも発生を維持しているはずです。



クロコノマチョウは、地球の温暖化によって北方へと分布をひろげているチョウです。